

平成 23 年度 国際ボランティア貯金センターの支援にかかる
「NGO 講演会等概要レポート」

一般財団法人 ゆうちょ財団
国際ボランティア貯金センター

【N G O 講演会等の経費助成】

(平成 23 年度実施概要)

国際ボランティア貯金の寄附金の配分を受けているN G Oが学校、地域団体等で、国際協力及び国際支援の意識醸成を図るための講演会等を開催し、自団体の海外での事業活動状況等を説明する場合に、その経費の一部を助成しております。

概要は次のとおりで、申請により当国際ボランティア貯金センターで審査しました。

なお、対象となる平成 22 年度または 21 年度に寄附金の配分を受けた団体には、文書で通知しました。

- 助成する金額は、講演会等 1 回につき所要経費のうち 5 万円を上限。
ただし、助成回数は 1 団体につき 1 年 1 回。
- 助成の対象とするのは、次の講演会等とします。
 - ・ 国際ボランティア貯金の寄附金の配分を 22 年度または 21 年度に受けている団体の講演会等であること
 - ・ 参加者（児童・生徒等を含む）が概ね 30 人以上見込まれる講演会等であること
 - ・ 平成 23 年 5 月から平成 24 年 2 月末日までに開催する講演会等であること
- 助成は申請受付け順とし、10 件の申請があり、8 団体へ助成しました。

Index

1	アジア・アフリカと共に歩む会	1
2	特定非営利活動法人 ADRA Japan	3
3	特定非営利活動法人 オアシス	6
4	特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか	8
5	CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナル	10
6	スリヤールワ スリランカ	12
7	特定非営利活動法人 プロワークス十和田	14
8	宮城国際支援の会	17
9	アンケート結果	19

(50 音順)

アジア・アフリカと共に歩む会(TAAA)

1. 開催日：平成 24 年 1 月 8 日
2. 開催場所：浦和コミュニティセンター 第 15 集会室
3. テーマ：TAAA 南アフリカ帰国報告会「南アで広がる、学校・地域への教育・農業支援」
4. 講師：①氏名 TAAA 南ア事務所代表 平林薫
②氏名 南アフリカ NGO「ウムトンボ」サンディーレ・ムカディ
5. 参加者：30 名
6. 内容：講演① 「図書普及と菜園活動の意義～南ア社会の今／問題点と可能性～」
講演② 「サーフィンがストリートの子供たちに夢と希望を！
～サーフィンの魅力とスポーツの力～」

～ ～

講演会内容

■講演概要

現在の南アフリカ共和国は、アパルトヘイトの負の遺産に加えてグローバル化による新たな経済格差の拡大に苦しめられている。クワズルーナタール州の、貧しい遠隔地域の児童、および、大都会のストリートで暮らす子どもたちの様子を、社会背景を交えて紹介し、彼らへの支援活動がどのように生かされているのかを映像を使って説明した。

(1) 講演①「図書普及と菜園活動の意義～南ア社会の今／問題点と可能性～」

TAAA 南ア事務所代表 平林薫

現在クワズルーナタール州ウグ郡内の 3 地域、30 校を対象に行っている菜園プロジェクトと図書支援プロジェクトの活動内容をビデオ映像で詳しく説明した。

学校菜園の意義としては主に、給食の充実化、基礎的な菜園技術の伝授、意識改革の 3 点があげられる。小学校の時に土いじりになじませることで、技術習得だけではなく、農業に対してポジティブな考えをもたせる。子どもの時の意識改革が、将来的にこの地域での家庭菜園や小規模農業の発展につながっていく。

有機農業専門家によるワークショップの様子や「菜園と栄養」というタイトルでコンテストをした様子などが紹介され、菜園を通して、食の安全、栄養、環境、保健など様々なことを生徒と教師に伝えている様子が詳しく伝わった。

図書支援に関しては、対象校のほとんどは図書室がないため、現段階では移動図書館車が非常に有効であることを説明した。移動図書館車は、1 学期に 2 回学校間を巡回するが、道路が舗装されていないので悪天候の時はとても大変である。図書館車は、生徒にも先生にも貸し出して大変喜ばれている。生まれて初めて本を借りる子どもも多い。何もない低開発の地域に図書活動することの重要性を、本を嬉しそうに借りる子どもたちを通して伝えた。また、平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月まで国際ボランティア貯金の寄附金で行ったドウェドウェの学校図書支援の成果を説明した。

(2) 講演②「サーフィンがストリートの子供たちに夢と希望を！」

～サーフィンの魅力とスポーツの力～

南アフリカ NGO「ウムトンボ」サンディーレ・ムカディ

大都市ダーバンにある、ストリートチルドレンを保護・支援している NGO「ウムトンボ」が、アート、サッカー、サーフィンなどのアクティビティや体や心のケアを通して子どもたちを矯正し、少しずつ家庭や学校に戻している活動が沢山の映像を交えて紹介された。ウムトンボ・センターでは、ストリートにいる子どもたちを保護し宿泊させている。歯磨きなどの身支度を教え、健康的な食事を提供し、ソーシャルワーカーを常駐させケアをしている。

ムカディ氏は、2008 年からサーフィンを指導しているが、少しずつ活動の成果が出てきていることを実感している。設立当初に保護された子どもの 2 人は海水浴場のライフガードの職を得た。また、シンナー付けだった少年がサーフィンを始めてから、見違えるように健康になった。

危険なストリートに戻ると悪いことに巻き込まれるため、サーフィンをする子どもには、なるべく長時間ビーチにいさせるように努力している。子どもたちの自尊心を育てるために、賞状やメダルを多くあげるようにしている。彼らが、家や学校に戻ったときに賞状があると、「やっかいな子供」としてではなく、何かを達成してきた子どもとして、暖かく誇りをもって迎えてくれるので、これは重要なことだ。ムカディ氏の具体的な活動だけでなく、ストリートでのシンナーの売買など子どもを巻き込む社会問題もしっかり伝わった。

受講者の感想

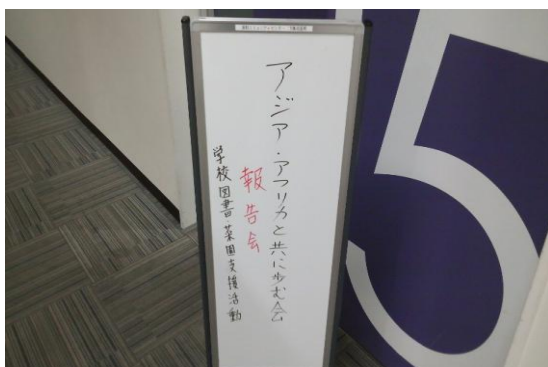
* 世界には考えられないほどの貧困の中で生きている子ども達が沢山いるということを再認識させられた。できる範囲での支援を心掛けたいと思った。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：基礎教育支援のための図書配布、本棚・コンテナ図書室の配備

■実施期間：平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月

■実施地域：南アフリカ共和国クワズールーナタール州ンドウェドウェ地域



特定非営利活動法人 ADRA Japan

1. 開催日：平成 24 年 1 月 27 日・28 日
2. 開催場所：①函館三育小学校 ②函館三育保育園 ③SDA 函館キリスト教会
3. テーマ：「災害と復興～2007 年ペルー地震を事例に～」
4. 講師：橋本笙子（ADRA Japan 事業部長）
中野佐知（ADRA Japan 事業部プログラムオフィサー）
5. 参加者：136 名
6. 内容：講演①②③④ 「ADRA Japan 活動報告」

～ ～

講演会内容

■講演概要

2011 年 3 月 11 日に東日本を襲った大震災から 10 か月が経った。2007 年 8 月に起こったペルー地震の被災者のために ADRA が行なってきた支援活動について、町の復興、住民の復興活動の様子を含めて報告した。被災者支援、復興支援に対し、一人ひとりがどう考え、どう行動できるかを参加者にも考えてもらった。

講演①「ADRA Japan 活動報告」

橋本笙子 (ADRA Japan 事業部長)、中野佐知 (同プログラム・オフィサー)

ペルー事業（国際ボランティア貯金助成事業）の国内で実施した絵画での交流のキャンペーンに参加した児童及び同校の児童に対し活動報告を行なった。また、被災者（地）の「支援」について問題提起し、どう行動することができるのかを考えてもらった。

ペルー事業についての事業地の背景（震災後、学校に行けない子どもたち、遊び場のない子どもたち）から事業の必要性について話し、事業によってどのように変化が起こったか、「絵画の交流」を通じてペルーの子どもが感じたこと等を紹介した。こうした活動への参加方法の一つとして、国際ボランティア貯金についても紹介した。また、昨年、東日本大震災も合わせ、被災者（地）の支援の在り方について、北海道という場所から、小学生として、もしくは日本人としてどのような行動ができるのかこちらから問題提起し、それぞれの参加者に考えてもらった。

「アドラのお話をきいて、私たちが、被災地のためにしてあげたい事じゃなくて被災地のためにできることをするというのが大切だということがわかりました。何をするにも相手の立場にたって考えなければいけないなあと思います。私たちにできるのは募金をしたり、お祈りしたりするほんの少しのことだけど、忘れないで覚えておくことが私たちにできることだと思いました、橋本さん、これからは私たちに今困っている人のことを教えてください。」との感想があった。

講演②「ADRA Japan 活動報告」 橋本笙子 (ADRA Japan 事業部長)

写真スライドを中心に、ペルー事業を始め、「地震」や「教育」といった共通キーワードで事業の紹介を行なった。また、教師とは個別に質疑応答を行なった。

最初に ADRA の紹介を行ない、そのあと写真スライドを見せながら、ペルー事業について紹介し、「地震」「教育」という共通のキーワードで東日本、南スーダンやハイチの写真も紹介。各国の違いについても語った。当初、40 分程度の予定であったが、園長からの希望もあり、さらに 20 分延長した。園児からも多くの質問や感想を受け、大盛況であった。講演終了後に、教師（保育士）か

らの質疑応答、コメントフィードバックの時間も設け、この時間に国際ボランティア貯金についても説明を行なった。

「外国の学校や幼稚園は（建物だけでなく周りの環境を含めて）自分たちのものとはだいぶ違うので驚いた。（東日本の）地震の時、怖かった。でも、そのあと家に帰ることができたのでよかった。地震で家がなくなってしまった人は帰れないのでかわいそうです。元気になるようにお祈りします。」との感想があった。

講演③「ADRA Japan 活動報告」 橋本笙子 (ADRA Japan 事業部長)

小学生を対象に「災害と復興」をテーマに、支援や減災についての講演を行なった。事例としてペルー事業や東日本での事業を取り上げ、比較しながらそれぞれの事業での困難な点、支援の相違点・共通点等を発表した。

小学生を対象に「災害と復興」をテーマに講演。災害後の支援について ADRA の活動（ペルー事業、東日本事業）を例に紹介した。同じ災害被災者支援の中で共通すること、反対に地域によって異なることなどを紹介した。ペルーでは地震から 4 年半が経ったが、その時間の中での被災者の心の変化について紹介。東日本大震災の時には多くの人々が「支援」を行なったが、どれだけ被災者の身になって考えられるか、自己中心的な行動になっていないか等、事例を入れながら振り返りを行なった。また、小学生個人として、もしくは家族と一緒にできる活動について一緒に考えた。ここで国際ボランティア貯金（ゆうちょボランティア貯金）についても紹介した。さらに、減災のために平時の準備や緊急時の身の守り方、そして家族との連絡手段の確保などについてもはなした。

「ペルー地震の津波が日本に来て、日本の地震の津波がペルーにも行ったという話を聞いて、遠い国だけれど、太平洋でつながっているということを実感した。」との感想があった。

講演④「ADRA Japan 活動報告」

橋本笙子 (ADRA Japan 事業部長)、中野佐知（同プログラム・オフィサー）

「災害と復興」をテーマにペルー事業の活動報告、東日本大震災被災者支援での経験等についての講演を行なった。

災害後の支援について ADRA の活動（ペルー事業、東日本事業）を例に紹介した。ペルー事業については裨益者である児童の保護者の変化について紹介し、事業による質的効果について語った。また、事業実施のために国際ボランティア貯金を活用した事を紹介し、国際ボランティア貯金について紹介。これについては、報告会参加者に詳しい方がおり、国際ボランティア貯金への参加方法についても他の参加者に説明して下さるという一幕もあった。また、実際に国際ボランティア貯金に参加していた方もおり「資金が実際に使われている様子が分かり嬉しかった。東日本大震災を経験したことで、ペルーの地震や被災者支援について現実味を持って話を聞くことができた。」という感想も頂いた。この他、東日本大震災被災者支援事業での経験（発災後の動きや被災者の多岐にわたるニーズ、行政との調整、支援活動の中での葛藤等々）についても話した。最後には質疑応答を行ない、質問やコメントを頂いた。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：初等学校校舎の建設及び施設管理に関する研修事業

■実施期間：平成 22 年 5 月から平成 23 年 3 月

■実施地域：ペルー・イカ州ピスコ郡サンクレメンテ区



特定非営利活動法人 オアシス

1. 開催日：平成 23 年 9 月 22 日（木）
2. 開催場所：愛知県豊川市勤労福祉会館
3. テーマ：「生き方在り方講演会（NGO 講演会）」
4. 講師：①非特定営利法人オアシス理事長 渡邊坂司
②JST（アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構）
代表 チア・ノル
5. 参加者：240 人（豊川工業高等学校 3 年生 230 人、教職員 10 人）
6. 内容：講演① 「オアシスの国際支援活動」
講演② 「祖国カンボジアへの思い」

～ ～

講演会内容

■講演概要

講演①「オアシスの国際支援活動」 渡邊坂司氏

まず、本法人渡邊理事長が、カンボジアでの支援活動をスライドを通し感想を交えながら説明を行った。特に、国際ボランティア貯金からの寄附金で実施したカンボジアでの最初の支援校チェイ小学校、続いてクラウ小学校の建設工事の様子、竣工式典までの流れ、新教室での授業の取り組みなどを紹介した。また、本法人のカンボジア支援の中心が学校づくりであり、これらの資金の多くは、国際ボランティア貯金をはじめとする各種財団の基金から寄附で実施していることを報告した。

最後に、本法人の活動のもう一つの柱であるショーマジックの一端を理事長が披露し、マジックが世界の共通言語であり、これまで 68 か国の公演で世界の子どもたちと心を通わせてきたことを話した。

公演②「祖国カンボジアへの思い」 チア・ノル氏

講師チア・ノル氏もスライドを使い、日本の中学・高校・大学で培った流暢な日本語を操っての講演であった。講演の前半部は、歴史の波に翻弄された苦難多き少年・青年時代の話。ポルポト政権下、カンボジアを逃れ難民として日本にたどり着いた経緯。その後、日本人の養子となり、大学卒業後は、日本とカンボジアの架け橋となるために日本政府派遣のアンコール遺跡の修復事業に参加した。

遺跡修復事業への参加に伴いカンボジアに帰国しが、祖国の極度の貧困を目の当たりにして、それらを少しでも解消するために行動を起こそうと決意した。その結果、2005 年に NGO「アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構（JST）」を設立し、主に青年層への自立支援や子供たちへの教育支援を中心とする活動を継続している。

とりわけ資金の確保については、オアシスをはじめとする日本のボランティア団体の支援で実施してきていることなど、日本との関係があつてこそ自分たちの活動がある。

また、これらの活動をより発展させるためには、今までどちらかというと無関心であった村の大人を、私たちの活動にできるだけ多く参画させていくことが重要であることを強調した。

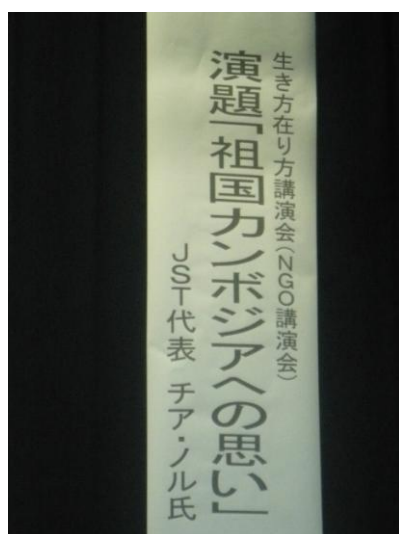
「ボランティア活動は、自分自身の生活があるからその程度は人それぞれであり、みな同じことをやる必要はない。特に大事なことは、つながりを活かしお互いのよさに学び、自分を高めていこうといった思いを持つこと」と述べ、講演を締め括った。

受講者の感想

- * 世界の子ども達を助けるのに国を動かさなくても1人1人の力でも出来るのだと思った。必要なのは気持ちだと思った。
- * 今日、話を聞いて、日本自体とても恵まれていると思ったし、普通に学校に行けることがとても幸せなことだと思った。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

- 支援事業：小学校の教室増築、教員養成指導及び授業実施
- 実施期間：平成22年4月から平成23年3月
- 実施地域：カンボジア王国シェムリアップ州アンコール・クラウ村



特定非営利活動法人 国際交流の会とよなか(TIFA)

1. 開催日：平成 23 年 7 月 2 日（土）
2. 開催場所：豊中市立生活情報センター「くらしかん」イベントホール
3. テーマ：「ネパール・活動報告と交流」
4. 講師：①氏名 ネパール・ドダウリ村 NGO 代表者 バスデブ・アディカリ
②氏名 ネパール・シンズリマディ技術指導助手 スリジャナ・サヌワール
③氏名 TIFA ネパール NGO コーディネーター バティ・シュレスタ
5. 参加者：80 名
6. 内容：
 - 第一部 講演① 「ドダウリ村の自立支援活動と診療所の状況」
講演② 「子どもの家卒業生の技術研修報告」
講演③ 「サクーでの女性の自立センターの活動」
 - 第二部 ネパールと歌と踊り
スリジャナ・サヌワール
 - 第三部 ネパールカレーを食べながら交流

〜〜

講演会内容

■講演概要

当会が国際ボランティア貯金の配分金を受けて実施してきた、ネパールの東部の田舎シンズリ郡での支援活動が現地の人たちにとってどのように役立ってきたか？を現地から招聘した講師が直接講演した。

(1) 講演①国際ボランティア貯金の配分金事業「診療所の運営支援」活動報告

現地 NGO 代表 バスデブ・アディカリ

約 15 年前、職業訓練センターを建設し、識字教室、洋裁教室、村人たちが集まる場所ができ、それを拠点にして活動していたが、村人たちの強い要望により診療所を建設し、運営支援を受けてきた。今年度は、現地医師の雇用費の補助を受ける事ができ、看護師だけでなく医師もそろった診療所になり、この村だけでなく近隣の村々の人たちのためにも役立つ大切な施設になりつつある。今回初めて日本を訪れる事ができ、あちらこちらを見学して、現地でもできる事を取り入れながら、より役立つ施設にしていきたい。村人たちは日本からの国際ボランティア貯金の支援に大変感謝している。

(2) 講演②「子どもの家卒業生の技術研修報告」

技術研修者 スリジャナ・サヌワール

当会が以前国際ボランティア貯金の配分金を受けて開設した孤児院「Happy Girls Home」の卒業生が縫製・手工芸技術の研修を積んで自立できるように、日本へ招聘し、洋裁技術、パッチワーク、刺繍などの技術研修をした。その感想と、ネパールへ帰ってからの計画を話した。

(3) 講演③「サクーでの女性の自立センターの活動」

TIFA ネパールのコーディネーター バティ・シュレスタ

カトマンズ郊外で実施している、「自立センター（洋裁・識字・コンピュータークラス）」の

運営状況を紹介。

受講者の感想

- * ネパールの様子がよくわかり、国際ボランティア貯金の助成金が有意義に使われていることがわかった。
- * 講師はなれない日本に来て臆することなく、村人の思いを語ってくれ、感激した。
- * 日本のNGOが国際ボランティア貯金の助成を受けて素晴らしい活動をしていることを知り、感激した。
- * 援助を受けている現地の代表者から直接話が聞けたことは、とてもよかった。
- * ネパールは遠い国だと思っていたが、直接はなしや、踊りや歌が聴けて、ネパールが身近な国になった。

国際ボランティア貯金の配分事業の概要

- 支援事業：診療所の運営支援[ネパール]
- 実施期間：平成23年4月から平成24年3月
- 実施地域：ネパール・シンズリ郡 ドダウリ村



CRI-チルドレンズ・ハウス・インターナショナル

1. 開催日：平成 23 年 6 月 12 日
2. 開催場所：厚木市下川入『青年の家跡地 自然園』
3. テーマ：「異文化交流」
4. 講師：小貫 大輔（CRI 代表運営委員）、
柴田ファビアナ・ミズエ（ポルトガル語教師）
松村ジュリア（ブラジル人学校代表）
ミヤガサコ・ナンシー理沙（CRI 次期代表運営委員）
福井俊紀（CRI 会員）
鈴木真由美（CRI 現地スタッフ）

5. 参加者：150 名

6. 内容：講演会と Festa Junina（ブラジル収穫祭）

~~~~~

### 講演会内容

#### ■講演概要

今回、2 部構成で、第一部では Festa Junina（ブラジル収穫祭）、第二部では CRI の活動報告会を行った。第一部では総勢約 150 人（東海大学生約 30 人、CRI 関係者約 20 人、Escola Aquarela スタッフ／児童／保護者 40 人、近隣住民約 60 人）の参加者が集い、CRI の活動について説明した後、シュハスコ（ブラジルの BBQ）を食べ、子どもと輪投げ／缶倒し／釣ゲームをして遊び、松村ジュリアと柴田ファビアナの指導でブラジルの文化について学び、60 人で大きな輪を作ってフォークダンスを踊った。

第二部では CRI 代表の小貫大輔が、CRI 発足の経緯、活動の方向性、『国際ボランティア貯金』の寄附金を受けて、ブラジル北部の漁村カノア・ケブーラーダでの『出産、育児および性に関する教育の実施および教育施設の建設』や、サンパウロ州のファベラ・モンチアズールでの託児施設建設、その他、国内外で活動している現状について講演した。また、サンパウロ州で託児施設建設を担当した福井俊紀が建設計画を打ち立てた背景、そして建設当時について詳しく解説した。

次に、セアラ州で活動している鈴木真由美が現地での教育活動について説明した。最後に 7 月 1 日より CRI の次期代表となる宮ヶ迫ナンシー理沙が、今後の団体の活動について触れ、自分が CRI 会員となった経緯や、自身がブラジルにルーツを持ち、日本国内で国外にルーツを持つ人々の為に活動している旨を語った。

#### 受講者の感想

- \* 活動報告会を通して、CRI が今までどのような活動を国内で行ってきたのか、また、日本人ボランティアがブラジルで行ってきた活動について具体的に知ることができてとてもよかった。
- \* 報告会を通して、ブラジルの事についてたくさん知ることができ、CRI の活発な活動写真も見ることが出来てとても興味深かった」など、様々な感想が寄せられた。
- \* 私は現在大学 2 年生で、在日の中南米の子供達や家族の方などと交流を持ちながら、国際理解を深めている最中です。今回、CRI の活動報告会を聞き、これからの活動に関する時間の使い方や考え方に対して大変参考になりました。また、その目的などを私たちの活動にも参考にすること



ができる、と感じました。

#### 国際ボランティア貯金の配分事業の概要

■支援事業：出産、育児及び性に関する教育の実施及び教育施設の建設に係わる事業の実施計画書の承認について

■実施期間：平成22年4月から平成23年3月

■実施地域：ブラジル・セアラ州フォルタレーザ市及びアラカチ市カノア・ケブラーダ地区



## スリヤールワ スリランカ

1. 開催日：平成 23 年 11 月 11 日
2. 開催場所：名古屋市立猪高中学校
3. テーマ：「国際理解 伝統文化を学ぶ」
4. 講師：①服部和子（スリヤールワ スリランカ 代表）  
②池田教一（スリヤールワ スリランカ 事務局長）
5. 参加者：206 名（生徒） 15 名（先生）
6. 内容：講演①「スリランカの太鼓と民族舞踊」  
講演②「スリランカの概要、世界遺産、衣食住、国ボを使っの現地の活動  
質疑&応答」  
講演③「民族衣装の試着体験 生徒 23 人&先生 2 人」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

### 講演会内容

#### ■講演概要

スリランカの概要、世界遺産、衣食住、国際ボランティア貯金の寄附金配分金を使って「農村女性の自立の為の職業訓練所」を 5 年間、スマトラ沖地震の津波エリアに託児所を 5 年間、貧困地域の人々に農業を指導し、収入が得られることをめざしてドラゴンフルーツの生育を 1 年と、それぞれの地域で何が求められ、必要とされているか説明を行った。地域住民と話し合い、指導をしながら支援をするが、するほうもされる側も一緒になってやっていくことが大切であること。またそれぞれの事業が、配分金を受けた期間で終わらず、継続していることで、いままでやってきた事業すべてが、住民の生活レベルのアップ、幼児教育の浸透と親たちも教育の大切さを彼らの子どもの成長から理解するようになり、それが日本に向けての感謝の念にもつながっていったことを報告した。

#### (1) 講演①「スリランカの太鼓と民族舞踊」服部&池田他 4 名（スリヤールワ スリランカ）

スリランカに 2000 年以上前から伝わる太鼓と民族舞踊を披露した。太鼓は 7kg から 10kg あり、コスチューム等、国際ボランティア貯金の活動でスリランカへ出かけたときに、何回かに分けて少しずつスリランカから持ち帰り、すべて made in Sri Lanka。学校での講演のときの異文化紹介のほか、地域でのイベント、老人福祉施設等で踊り、みなさん大変喜ばれている。

#### (2) 講演②「スリランカの概要、世界遺産、衣食住、

国際ボランティア貯金の寄附金で実施した現地の活動 質疑&応答」

服部&池田（スリヤールワ スリランカ）

スリランカについて位置、首都、人口、言語、民族、宗教等基本的な事項、そして 7 か所ある世界遺産のうちの仏跡、遺跡は観光地としてのとらえ方ではなく、仏教徒が約 70%のスリランカでは、古来から続く信仰の対象として、家族ぐるみでお参りに行く大切な場であること。学校からオフのあった衣食住については託児所に通う子どもたちの家を家庭訪問した時や、職業訓練所の写真等、国際ボランティア貯金の寄附金を使っの現地の活動と合わせて、パワーポイントやパネル展示を使って解説。日本は春夏秋冬と四季があるが、スリランカは年中 28 度であることから、衣は主としてスリランカ独特のキャンディアンサリー、食は朝、昼、夜と野菜を中心としたスパイシーなカレー、住は日干し煉瓦やブロックを材料とする家がジャングルのようなところに建ち、エコな自然

の涼しさを上手に活用している。質疑&応答はたくさんの生徒さんからたくさんの質問があり、全員の質問を聞くことができなかったことは残念であった。

### (3) 講演「民族衣装の試着体験」服部&池田他 4 名(スリヤールワ スリランカ)

スリランカの民族衣装、キャンディアンサリー、サリー、パンジャミスーツ、サロン、パティック等 21 着と男女ウエディングの衣装を紹介。サリーは 5~6m ある布を生徒に着付けしながら、着方を紹介。その他の衣装もステージ上で生徒が試着。男女ウエディングの衣装は先生がモデル。全員試着したところで各衣装の紹介、そしてファッションショー。体育館にいる生徒、先生、みんな大変な盛り上がりで、「百聞は一見にしかず」のとおり、「衣」を楽しみながら理解したようだ。

### 受講者の感想

- \* 今回の講演を聞いて、スリランカの状態、NGOの活動など良く分かり、スリランカの人達のために頑張っているNGO・ボランティアの方々には感謝の気持ちでいっぱいになりました。
- \* 国同士が行っている支援もとても良いと思うけど、NGOの住民等を対象にした支援は、現地の人々が本当にしてほしいことを聞けるので、すごいと思った。
- \* スリランカという国を知って自分たちがどれだけ幸せな豊かな国に生まれてたかということに強く心を打たれました。

### 国際ボランティア貯金の配分事業の概要

- 支援事業：農業所得向上のためのドラゴンフルーツ栽培指導
- 実施期間：平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月
- 実施地域：スリランカ ハンバントタロード マダエリア ウンガマ





## 特定非営利活動法人 フロワークス十和田

1. 開催日：平成 23 年 12 月 4 日（日）
2. 開催場所：青森中央学院大学新町サテライトキャンパス
3. テーマ：これからの国際協力を考える インドとベトナムの支援から見えるもの
4. 講師：①青森県立保健大学健康科学社会福祉学科教授  
あおもりとベンガルをつなぐ会代表 千葉たかこ先生  
②ベトナム・イエンズン県幼稚園教師派遣事業 音楽指導員 山内豪士先生
5. 参加者：30 名
6. 内容：講演① 「これからの国際協力～自給自足か開放か～」  
講演② 「イエンズン県のこれから～幼児教育の現場から～」

### 講演会内容

#### ■講演概要

本講演会について、当初は 11 月 20 日の予定であったが、講師の方のご都合や会場の都合により、12 月 4 日に青森中央学院大学新町サテライトキャンパスに変更しての開催となった。

また、今回の講演会の趣旨である「これからの国際協力を考える」というテーマのもと、当初予定であった千葉先生の講演に合わせて、当団体で昨年実施をした事業ベトナム・イエンズン県のタンクオン村への音楽指導員として派遣した山内先生の報告会も重ねて実施した。両講師ともに青森県在住で、青森県から発信している国際協力の貴重な事例でもあり、県内の国際協力に興味のある方々に多くのヒントや勇気、知識が頂けると思い、追加企画をした。

国際ボランティア貯金の寄附金配分により、当団体がベトナム・イエンズン県タンクオン村に幼稚園を建設した活動状況も報告を行った。

#### <第 1 部>これからの国際協力～自給自足か開放か～

青森県立保健大学健康科学社会福祉学科教授

あおもりとベンガルをつなぐ会代表 千葉たかこ先生

これまでインドの西ベンガル地方の環境保全型農村開発を行う NGO の支援を行ってきたが、特に少数民族であるのサンタル民族についての支援についての報告があった。

サンタル民族は少数民族ではあるが 500 万人という人口であり、日本人から見れば桁違いのスケールであることに驚かされた。しかし、識字率が低く、女性の地位が低いなど特に貧困層が多い。学校では、ベンガル人の教員からベンガル民族にイスと机が与えられても、サンタル民族には与えられず、地べたで授業を受けさせられるなど、サンタル民族は差別的な扱いを受けている。教員が授業にほとんど来なかったり、インドの夏は暑いため、サンタル民族の子どもの足では何キロも離れた土地から歩いて来られず、次第に学校やめてしまったり、女性は思春期になると、女性としてのケア体制がないため、学校をやめてしまうことがある。

「あおもりとベンガルをつなぐ会」では、そのような状況を「自分達の手で何とかしよう」というモチベーションをあげることが何よりも大切だと実感し、多目的教育センター「マドプール」を

設立し、女性のための識字教室を開いたり、働く女性のために保育所の運営や編み物を教える講座を実施してきた。

タイトルにある「自給自足型」と「開放型」の支援の考え方について、自給自足型とは、日本の災害は日本の責任といったふうに、自分達の国のことは自分達で何とかするべき問題であるという考え方である。一方、開放型とは、困っている人がいたら、自国だろうが他国であろうが関係なく、相手の気持ちになって支援する。自分たちが支援しているのは、たまたま目の前に困っている人がいて、それがたまたま西ベンガルの方だったというだけである。これからの国際協力は、上から目線の支援ではなく、「協働」して共に生きていくこと求められているという報告があった。

## ＜第2部＞イエズン県のこれから～幼児教育の現場から～

ベトナム・イエズン県幼稚園教師派遣事業 音楽指導員 山内豪士先生

昨年7月中旬から約1カ月に渡り、ベトナム・イエズン県タンクオン村にて、音楽指導員として、現地の子どもたちや先生方にピアノの指導を中心に活躍した。まず、現地に行って驚いたことは、準備したキーボードの値段が現地の方の月収の6か月分に当たる大変高価なものであり、一般的になかなか手にすることができない上に、それを指導できる人がほとんどいないということだった。そのような状況から、なぜ、キーボードから音が出るのが分からず興味津々の子どもやどうやって使ったらいいかわからない子、壊してはいけないと思っているため触れない子がたくさんいた。しかし、少しずつやり方を覚えていくうちに次第に自信を持って触れるようになった。先生方も勉強熱心であり、一生懸命に何度も何度も練習を行った。そのベトナムの方々の勉強熱心さや向上心には感心した。また、先生方をはじめ、ベトナムの方々はとても耳がよく、聞いた音を鍵盤で再現する力に長けていたことに大変驚いた。日本人とは違うすばらしい資質とそれを大切にしてきた文化があることを学んだ。苦労したことは、日本のようにすべての子どもが同じような教育を受けることができないということだった。それは、保育料を払っている家庭の子どもは優遇され、そうでない子どもは活動に参加できないことを明確に区別しており、自分が目指したい指導がはじめはできなかった。その後、県知事に交渉して許可を得て、全員で活動することができたが、そこが共産圏の難しさであった。また、ピアノ伴奏をつけた絵本の読み聞かせ活動も行った。そのとき、明らかに子どもたちが集中して話の世界に引き込まれていくようすを目の当たりにして、その後、日本に戻ってから、「絵本の読み聞かせにピアノ伴奏をつけると子どもにどのような影響を与えるか」という研究を大学で始めた。現地に教えに行ったつもりが、逆に教えられることが多く、人と人との温かさや、勉強熱心な国民性、自分のこれからの指針など、大切なことを学んだと報告があった。

## 受講者の感想

- \* 途上国への援助だけでなく、東日本大震災のボランティアにしても「自給自足原則」と「開放原則」と、どちらの立場を取るべきなのか。また、上から一方的な「支援」から、互いに働き助ける「共生」へと転換していかなければならない、という話を伺い、国際理解のあり方について新しい視点から考えることが出来た。
- \* 保育園の音楽の話では、外国の方は向学心が高いなと思いました。ただ、やはり、どちらの国にも差別や貧富の差が目立つのは仕方がないことなのかなと思ったが・・・今は何とも言えない。
- \* 開発途上国での音楽授業は画期的だと思います。楽器の寄附等、もっと呼びかければ集まるのではないのでしょうか。

## 国際ボランティア貯金の配分事業の概要

- 支援事業：幼稚園の備品の配備及び教員養成指導
- 実施期間：平成22年4月から平成23年3月
- 実施地域：ベトナム



## 宮城国際支援の会

1. 開催日：平成 23 年 10 月 29 日
2. 開催場所：仙台市市民サポートセンター
3. テーマ：「NGO・宮城国際支援の会 2011 報告会」
4. 講師：①宮城国際支援の会 会長 鈴木信
5. 参加者：32 名
6. 内容：講演① 「ネパールでのこれまでの国際ボランティア貯金による活動について」  
講演② 「タイでのこれまでの国際ボランティア貯金による活動について」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

### 講演会内容

#### ■講演概要

毎年仙台市内の中心部で行っている活動報告会であるが、国際ボランティア貯金による NGO 活動が一つの区切りとなることで、集大成的な報告会となった。また、毎年来場してくださる方も多く、昨年の報告会に出席できなかった鈴木会長の体調を心配されていた方もいたので、会長自身の闘病生活や今現在の健康状態などにも話が及んだ。

講演の第二部終了後に行ったネパール・タイおよび国際ボランティアに関するクイズでは、ネパール・タイにのみに留まらず、今までに会長が他のボランティア活動などで渡航したカンボジア、インド、ドバイ、中国などの写真も取り入れながらユーモラスな仕上がりになっており、また、会長が現地で購入したお土産を正解者上位に景品として渡すなどしたことで盛会となった。

#### (1) 講演①「ネパールでのこれまでの国際ボランティア貯金による活動について」

講師名 宮城国際支援の会 会長 鈴木信

足掛け 7 年に渡るネパールでの活動の軌跡を、過去に作成した DVD や最新の活動記録などをプロジェクターで上映しながら振り返る形式の内容となった。当時の苦労話などを中心にあらためて新規で国際ボランティア活動を立ち上げることの難しさや、その意義を伝えることが出来たと思われる。

#### (2) 講演②「タイでのこれまでの国際ボランティア貯金による活動について」

講師名 宮城国際支援の会 会長 鈴木信

洪水の影響で宮城国際支援の会が国際ボランティア貯金によって建設した学校のサポートセンターが浸水している様子など、現地からの最新の情報を、写真を織り交ぜて報告を行い、実際にこれまでの活動で何度か現地に入っているメンバーおよびサポーターには衝撃的な内容であった。

#### 受講者の感想

- \* 海外について知る機会がなかったので勉強になった。ネパールの現状について始めて知ったので更に知るためのステップになった。教育の重要性を強く感じた。
- \* ボランティアはよく聞くが、今回の講演を聞いて、色々な活動があるのだと改めて認識した。今後もこのような機会があれば参加したいと思った。
- \* 民間レベルでこれくらいの援助をされていてすごいと思った。もっとみんなに広く知ってもらいたいと思う。

## 国際ボランティア貯金の配分事業の概要

- 支援事業：保健衛生等に関するワークショップの実施、学校給食の配布
- 実施期間：平成 22 年 4 月から平成 23 年 3 月
- 実施地域：ネパール



## NGO講演会 アンケート集計結果報告書

### 【全体:509名回答】

Q1: 開発途上国への支援については、国同士が行っているほかに、本日の講演会等のようにボランティア団体(NGO)が住民等を対象とした支援・援助を行っていることを知っていましたか。

| 回 答 内 容 |        | 回答数 | %  |
|---------|--------|-----|----|
| 1       | 知っていた  | 257 | 50 |
| 2       | 知らなかった | 248 | 49 |
| 3       | 未回答    | 4   | 1  |

Q2: 本日の講演の事業は「国際ボランティア貯金」の寄附金の配分を受けて実施されましたが、事業内容について理解できましたか。

| 回 答 内 容 |          | 回答数 | %  |
|---------|----------|-----|----|
| 1       | よく理解できた  | 188 | 37 |
| 2       | まあ理解できた  | 303 | 60 |
| 3       | 理解できなかった | 7   | 1  |
| 4       | 未回答      | 11  | 2  |

Q3: 今後もいろいろなボランティア団体が開発途上国の住民等へ支援・援助することは必要だと思いますか。

| 回 答 内 容 |             | 回答数 | %  |
|---------|-------------|-----|----|
| 1       | 必要だと思う      | 453 | 89 |
| 2       | 国同士で行うだけで十分 | 23  | 5  |
| 3       | 分からない       | 26  | 5  |
| 4       | 未回答         | 7   | 1  |

Q4: ボランティア団体は寄附金の配分を受けて活動している話しをしましたが、今後も寄附によりボランティア団体を支援する制度は必要だと思いますか。

| 回 答 内 容 |            | 回答数 | %  |
|---------|------------|-----|----|
| 1       | とても必要だと思った | 307 | 60 |
| 2       | まあ必要だと思う   | 169 | 33 |
| 3       | 特に思わない     | 15  | 3  |
| 4       | 未回答        | 18  | 4  |

Q5: 今日の講演を聞いて、自分も寄附をしたいと思いましたか。

| 回 答 内 容 |          | 回答数 | %  |
|---------|----------|-----|----|
| 1       | したいと思った  | 339 | 67 |
| 2       | 特に思わなかった | 110 | 22 |
| 3       | すでにしている  | 52  | 10 |
| 4       | 未回答      | 8   | 1  |

Q6: 今日の講演を聞いて、ボランティア活動に参加してみたいと思いましたか。

| 回 答 内 容 |          | 回答数 | %  |
|---------|----------|-----|----|
| 1       | したいと思った  | 281 | 55 |
| 2       | 特に思わなかった | 191 | 38 |



|   |          |    |   |
|---|----------|----|---|
| 3 | すでに行っている | 26 | 5 |
| 4 | 未回答      | 11 | 2 |

| 年代別 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 未回答 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|     | 86% | 2%  | 4%  | 4%  | 1%  | 1%  | 2%  |

| 男女比 | 男性  | 女性  | 未回答 |
|-----|-----|-----|-----|
|     | 68% | 30% | 2%  |

### 【講演会の感想(抜粋)】

- ・ 世界の子ども達を助けるのに国を動かさなくても1人1人の力でも出来るのだと思った。必要なのは気持ちだと思った。他国の人もとても苦労していてただ支援を待っているだけではないと知ったので、これからは少し機会があったら募金をしてみようと思った。(男性・10代)
- ・ 今日、話を聞いて、日本自体とても恵まれていると思ったし、普通に学校に行けることがとても幸せなことだと思った。それと同時に、自分にできることがあれば小さなことでも参加・協力をしたいと思った。  
(男性・10代)
- ・ とても興味深い話を聞かせていただきました。ボランティアについても興味をもったが、自分自身の生活、仕事が厳しい状況であることを考えると、ボランティアも足が重くなってしまうとも感じた。(男性・20代)
- ・ 海外について知る機会がなかったので勉強になった。現地の現状について始めて知ったので、更に知るためのステップになった。(男性・30代)
- ・ 今回の講演を聞き、ボランティア活動に参加したいと思ったし、これからいろんなことに挑戦していきたいと思いました。また、個の講演があれば、参加したいと思います。(女性・30代)
- ・ 日本で暮らしていると忘れがちですが、世界には考えられないほどの貧困の中で生きている子供達が沢山いるということを再認識させられました。できる範囲での支援を心掛けたいと思います。(女性・40代)
- ・ 活動の様子がビデオで見ることができたので、イメージがより鮮明になり良かったと思う。厳しい環境の中、活動を続けていくことの大変さもより実感できました。(女性・50代)
- ・ 活動の中味は映像が充実していたこともあり、大変よく分かりました。ただ欲を言えば、その活動のどこにどんな資金援助をしているのか、資金援助の内訳も併せて示していただけたら、この活動の必要性等についても判断する材料があって、さらに有意義だったかと思います。講師の方の活動も大変有意義だと思いました。コミュニティとの合流が上手く行くとよいなあと感じました。(女性・60代)
- ・ 東日本大震災において、低開発国からも物心両面で支援を受けた。世界はつながっていることを実感した。逆に市民レベルでの国際支援で低開発国に返していきたいと思っている。(男性・60代)

### 【注】

- ・ アンケートは、年度途中に実施することが決まったため、講演会を開催した8NGOのうち5NGOのみが実施した。
- ・ 10代が著しく多い理由は、アンケートを実施した5NGOのうち2NGOが中学生及び高校生を対象にしたためである。よって10代の回答が全体の割合に大きく影響している。
- ・ 国際ボランティア貯金の制度のような寄附による支援を90%以上が必要だと考えている。
- ・ 上記のことから、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けた団体による講演会(報告会)は、国際ボランティア貯金の有効性や周知度高めるために効果があり、国際協力への興味や実践への情報提供の貴重な場になると思われる。